

推しに溺れて、壊される

——淫らな嘘は、まだ終わらない

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話 会えない時間に、濡れる心と身体

静まり返った部屋に、時計の針の微かな音だけが響く。

スタジオにも姿を見せず、一郎は渋谷の自宅に籠もり続けていた。

歌詞が書けないのだ。文字が浮かんでは消え、タイピングする手が進まない。そんな日々の中、思考の邪魔をしてくるものがある。

——サナだ。

肌の温もり、声の甘さ、サナの形、サナの音、サナの匂い——

思い出すのは、サナが淫らに崩れていく姿ばかりだった。

だからこそ、会わないようにしていた。一度会えば朝から晩まで肌を重ね続けてしまうと分かっている。

「……あいつ、今頃なにしているかな……」

一郎はぼつりと呟き、窓の外へ目をやった。

埒が明かない。彼女でいっぱいのを、一度抜き取るしかない。適当に動画を再生し下着をずらして椅子にもたれた。

画面に映るのはギャル系の女が男の股間にしゃがみ込み、唇を開いてゆっくりと咥えていくシーン。

（……はあ……）

一郎は何も感じていなかった。欲しいのはこの女の舌じゃない。

頭に浮かんでくるのは、頬を染め、あの小さな口で懸命に咥えてくる、サナの姿だった。

「サナ……」

その時だった。扉が、開く音がした。

「一郎さん、カモミールティーの限定版見つけたから買っ——」

その声に、心臓が止まった。

シャツの裾から下腹を覗かせ、ズボンは膝まで下ろされている。

モニターの画面には、ギャル女優が口いっぱい男根を頬張る姿。

サナの表情が一気に強張った。視線は一郎の股間とモニターに交互に向けられ、最後に固まった。

「私とはしてくれないのに……そんなので……処理ですか……？」

震える声だった。

一郎は慌ててズボンを引き上げるが、遅い。

サナの目にはすっかり焼き付いてしまっている。

「違う。違うんだサナ……これは……ただ、生理的な処理で……」

「画面の人……私と全然違う……」

サナの視線が落ちていた。モニターには、濃いメイクのピンク髪
の女が濡れた舌を使って音を立てながらしゃぶり続けていた。

「……ほんとには……こんな感じの子が……好きなんですか？」

震えた声、瞳は潤み切っている。

「いや、違う。タイプとかじゃない、これはたまたま流れて……」
だがサナの表情は沈んだまま。

「……私、だって……できます」

サナは手に持っていた紙袋——限定版だというカモミールティーの入った袋をゆっくり置き、椅子に座る一郎の前に、膝をついた。

「……サナ？」

「見ててください。……私のこと、ちゃんと……見てください」

そう言ってサナは一郎の間に割り入り、慣れない手つきでゆっくりもう一度それを露わにした。

細く白い指が震えている。それでも、その震えごと包み込むように

一郎のものをそつと握る。

そして――

「……あむっ……」

サナの小さな口が、一郎の先端を包み込んだ。唇が、舌が、熱い。

「……つく……!」

じゅるっ……ちゅぽっ……くちゅ、ぬちゅっ……じゅ、ちゅううう

「サ、ナ……おい、本気で……」

……んっ、ふう……れろ、じゅる、ちゅうっ……はむ……

サナは一生懸命だった。下手くそなのに、それが逆に色っぽい。

舌先を器用に使おうとするがうまくいかず、代わりに唾液を絡めな

がら舐め回す。

ちゅる、じゅるるる……っ……はあ、んっ、ぬちや、ちゅぽ……

サナの喉が一郎のものを扱き上げるたびに生々しい水音が響いた。

「くう……サナ、もう……やめろ、そんなに……したら……」

「やめません……っ、私……一郎さんのこと、好きです……っ」

声を震わせながら、サナは更に深く啜えこむ。

涙を滲ませながら、鼻先を押し当て、喉奥まで。

ぐっ、ぐぷっ……ちゅぽっ……ちゅぽっ……ちゅるるっ……！

「ぐっ……サナっ……！」

一郎の声が掠れる

サナは首を上下に何度も動かし、唾液で溺れるように続ける。

手は使わず、口と舌と喉だけで、必死に愛を伝えようとしていた。

言葉よりもずっと真っ直ぐで、激しく、切ない愛の告白だった。

ちゅっ、ちゅる、じゅぽっ……じゅるるっ……つぶはあ……

粘膜が擦れあう水音。甘く、淫らで、肌に響くような湿った音。

サナの唇が一郎の先端から離れたとき小さな吐息がこぼれ落ちた。

「……私のこと、嫌いに……なっちゃいましたか……？」

言い終わると同時に、サナは一郎にそっと身を寄せた。

濡れた唇が、彼の腹に当たる。

一郎は彼女を抱き寄せ、低く、息を混じらせながら呟いた。

「……嫌いになるわけないだろ……サナだけだよ。ずっと……」
その一言で胸の奥がじんわり熱くなった。涙が込み上げてくる。
同時に、脚のあいだから、疼きがぶわっと広がる。

身体はすでに一郎のものを咥え込んだ時から熱を帯びていた。
咥えるたびに、じんじんと蜜壺の奥がうずいていた。

一郎のものを味わった舌先は、もう震えが止まらない。

第二話 見ててください、一郎さん、私、壊れていくから

「……ありがとう。でも、今は……」

一郎の声が、優しく降ってきた。

「今は……まだ、抱けない。ごめん」

「……え？」

サナの表情が固まる。けれど一郎の顔を見ると、それが拒絶ではなく、自制であることに気づいた。

「歌詞が……やっと完成しそうなんだ……。ここが踏ん張りどころ

で。お前のこと、好きだからこそ、今……抱いたら、全部流されてしまいそうで」

「……」

サナは唇を噛み、ゆっくりと後ずさった。

頭では理解している。それでも、どうしようもなく、切ない。
なにより、身体がもう、待てなかった。

（……あんなに毎日、奥まで何度も……突かれてたのに）

（何日も我慢して……もう、一人で何度も慰めてるのに）

目の前に、一郎がいる。

大好きな、一郎がいるのに。

「……じゃあ、見ててください」

サナは立ち上がると、ゆっくりと、隣のソファへと腰を下ろした。

白いワンピースが、ふわりと舞いながら、脚を包む。

彼女は膝をゆるく開きながら、一郎の方を見つめた。

「一郎さん、抱いてくれないなら……せめて見ててください」

手が、ワンピースの裾に伸びる。

少しずつ、少しずつ、布をたくし上げていく。

なめらかな太もも。その内側。柔らかな付け根。

そして——ショーツ。

「サナ……やめろ、それ以上は……」

「……やめられません。一郎さんのせいなんですから……」

くちゅ……くちゅ……

指がショーツの上から、秘部を擦る音が響く。

くちゅっ……ちゅ……ぬちゅ……

「ふっ……あ……ん……」

サナは、自分で脚を少しずつ開いていった。

クロツチ部分が染まっていく。とつくに準備はできていた。

（見てほしい。見られたい。欲しがってる私を）

「……一郎さんに……何度も突かれたせいです……」

指先がショーツの隙間に入り、直接、濡れた粘膜をなぞる。

ぬちやつ……ぐちゅ……ぬる……ちゅぷ……

「ん……はあ……あ、あ……っ……」

サナは腰をくねらせ、うつとりと目を細める。

その姿は、官能そのものだった。

白い太もが開かれて、蜜壺の奥まで見えそうになる。

「っ、だ……め……もっ……奥、欲しい……」

サナは、ついにショーツを脱ぎ捨てた。

自分の秘部を指で割り、膣口をくちゅくちゅと押し広げてみせる。

「ここ……一郎さんに、いっぱい突かれた場所……見て……」

「サナ……やめろ、本当に……」

一郎は顔を背けそうになった。けれど、できなかった。

目が離せなかった。

指が中に入る音が、えぐく響く。

ずちゅっ……ずぶっ、くちゅくちゅ、ぐぼっ……ぐちゅうう……

「あつ、一郎さんの……太いの……っ、思い出す、うんっ……っ」

彼女の喘ぎと、くちゅくちゅという音が部屋中に広がっていく。

サナは自分の指を一本、ずぶっと奥まで差し込んだ。

「奥……届かない……一郎さんのじゃなきゃ、足りない……」

びくんっ、と腰が跳ねる。脚が震え、唇から甘い吐息が漏れる。

「一郎さん、見てっ……見て、私……こんなになっちゃって……」

ぐちゅぐちゅ……ちゅぷっ、ぐぼ……！

「一郎さんっ、見て……サナのイクところ……！」

サナの身体が跳ねた。

びくびくと痙攣しながら、透明な蜜をソファの上に垂らしていく。
絶頂の余韻で、胸が上下し、髪が頬に張りつく。

「……はあ、はあ……一郎さん……」

一郎は、無言で立ち尽くしていた。

拳を固く握って、歯を食いしばり、そして一言――

「……もう少しだ……もう少しで、終わらせるから……」

彼は背を向け、パソコンの前に座り直した。

サナはその背中を見つめながら、指先に残った自分の蜜を思った。

（……歌詞が書き終わったら……ちゃんと、また……）

呟くように問いかける。

「……終わったら、また……抱いてくれますか……？」

彼の背中は、揺れながらも、答えなかった。

湿った空気だけが二人を包んでいた。

第三話 誰でもよかったわけじゃないのに

私、いま何してるんだろうって、たまに思う。

仕事はしてる。スケジュール管理も、ファン対応も。

一郎さんの送迎がなくなっただけで事務所での仕事は山ほどある。

私はただのマネージャーとして通常業務をしてるだけなのに。

ふとした瞬間、どうしようもない寂しさが押し寄せてくる。

「……っ」

乳首が少し擦れただけで敏感に反応してしまう。